

平成12年7月31日  
企画調査報告書  
(平成12年7月分)

ドミニカ共和国企画調査員

吉井和弘

## 1. 業務の概要

ラ・ルイサ地区開発に関する企画調査を継続した。

### 1) ラ・ルイサ地区開発に係る連絡協議会

農地庁長官が召集した、第1回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会は、7月10日午前10時から正午まで、農地庁で開催された。

農地庁から4名（副長官、国際協力課課長、同課職員、企画課職員）大統領府技術庁から2名、農務省研究部1名、水利庁1名、大使館2名、JICA事務所から竹内次長と報告者、計12名が出席した。外務省と入植者代表は欠席した。

冒頭、農地庁 Juan Vásquez 副長官が挨拶し、本プロジェクトはドミニカ政府が日本人移住者に対する歴史的な約束を果たすものであることを説明し、その重要性を強調した。

その後、農地庁国際協力課 Enrique Chalas 課長が司会を務め、本プロジェクトの緊急性を強調し、国際協力課 Héctor Keppis 職員、企画課 Alfonso Viscaino 職員と JICA 企画調査員の3名からなる技術班が本プロジェクト（案）を作成するに至った経緯と経過を説明した。

その後の議論は開発のストラテジーと TOR を中心にして行われ、テーマは次の4点に要約できる：（1）地区住民の雇用創出、（2）地区住民のプロジェクトへの参加、

（3）灌漑設備の導入、（4）入植者の組織化と訓練。各点の討議の結論は次の通り。

（1）地区住民の雇用創出：モデル入植事業は生産性を上げるために、地区住民の雇用創出を脅かさない程度に機械化を行う。

（2）地区住民のプロジェクトへの参加：地区住民は地区のインフラ整備に参加するが、モデル入植事業には今の段階では参加しない。モデル入植事業は生産性をあげるために機械化を考慮した近代農業であり、地区農民の営む自給自足農業とは性質が異なる。

（3）灌漑設備の導入：入植地は年間雨量が2,000mm以上あり灌漑の必要性は少ない。

（4）入植者の組織化と訓練：開発調査によって収益性の高い作物の絞込みを行う必要がある。その後入植者の営農計画が決まってから、入植者の組織化と訓練を考慮する。

技術班が作成したプロジェクト（案）が、連絡協議会で承認されたのを受けて、農地庁は本開発調査の正式要請をする。

技術班は、水利庁など関連機関の指導をえて本開発調査の予算を概算し、コンサルタントのリストを作成し、次の連絡協議会に提示する。

今後、技術班が具体的な作業の進捗を報告し、関連機関の調整を図るために、連絡協議会を適宜開催する。

第1回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会の議事録と出席者名簿は別添（別添資料1）通り。



写真1.

第1回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会。テーブル正面は開会の挨拶をする農地庁 Juan Vásquez 副長官。農地庁会議室にて(7/11)。

## 2) 開発調査要請書のフォロー

第1回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会をうけて、農地庁は開発調査正式要請書を7月14日付けで大統領府技術庁に提出した。大統領府技術庁は7月21日に外務省に送付した。

## 3) 入植地

事業地の面積について、これまで発表された数字には若干の差がある。現時点で大使館が確認している数字は次の通り。

砂糖公団が農地庁に譲渡した面積.....15,500 tareas (969ha)  
農地庁が日系移住者に約束した面積.....12,618 tareas (789ha)  
日系移住者が入植可能な面積..... 7,390 tareas (462ha)  
不足面積.....5,228 tareas (327ha)  
入植決定者26家族分.....4,284 tareas (268ha)  
日系移住者が入植可能な残り面積.....3,106 tareas (194ha)

面積が不足してきたのは、砂糖公団の土地所有権にクレームがついたためである。10人の地主が現れて計327haの土地の所有権を主張している。

入植決定者26家族の土地268haは事業地の一角に纏めてある。

譲渡面積は1

家族当たり5-12haとばらつきがある。移住者に50年前に約束された300ヘクタールから過去にすでにもらった分を差し引いた差の面積が譲渡された。

ドミニカ人に与えられる分 180ha はオサマ川の南にある。日系移住者が入るところに居づわっている人を代替地として移動させる予定だという（添付資料 2、3 参照）。

農地庁は土地なし農民の入植地への侵入を恐れ、入植事業の看板と柵の建設を大使館に依頼した。



写真 2.

ラ・ルイサ入植地を視察する西牧農林水産開発調査部長（中央）、JICA 竹内次長（左）と石川領事（右）。一ヶ月の間に雑草がずいぶん生えてきた。雨量がかなりあることを示している(7/24)。

#### 4) 営農計画

入植決定者 26 家族分 268ha の土壌は、ドミニカ農牧企業社(JAD 社)の調査によるとラ・ルイサでは一番よい第 3 類土壌である。単年作物も永年作物もできる。

数人の入植決定者の意向によると、あまり手のかからない農業、つまり単年作物よりも永年作物がよいという。しかしながら、入植地に道路ができて各ロットの柵ができてからでないと、入植者は耕作を始めたくないという。少なくとも 1、2 年先のことである。しかし、土地なし農民の侵入の恐れがあり、作付けせずに入植地を放置しておくのはよくない。

永年作物の展示圃場を入植地につくるべく、農牧開発南部センター(CESDA)とのコンタクトを開始した。CESDA はドミニカ共和国最大の農事試験場で、JICA の果樹のミニプロジェクトが 1993-1996 年に実施された。

農地庁技術者が CESDA の所長と果樹研究員計 7 名を事業地に案内し、展示圃場の設置場所と果樹の種類を検討した。展示圃場は国道沿いのロット 59 番の入り口、北端のなだらかな傾斜に設置することにした。果樹の種類は、(1) パッション・フルーツ、(2) レモン、(3) ガヤバ、(4) サポテ、(5) サ克蘭ボの 5 種類を、それぞれ 5 ヶア (0. 31 ha) づつ植えることにした。

どの果樹もラ・ルイサ地区でみかける果樹であり、特に問題はない。入植地の真中に、ラ・ルイサ・プリエタの誰かが植えたのであろう、パッション・フルーツがある。よく実がなっている。

CESDA の所長と研究員とともに、農地庁技術者の案内でラ・ルイサ地区の農家を視察した。印象的だったのは、パッション・フルーツを栽培している農家だった。46 ヶア (2.

9ha) を13ヶ月前に植えて1日900ペソ(\$56.00ドル)の収入を得ていた。パッション・フルーツは、植えてから9ヶ月で収穫が始まる。この農家ではパッション・フルーツを更に200ヘクタ(12.5ha) 植える準備がしてあった。



写真3.  
ラ・ルイサ入植地を視察する農牧開発南部センター(CESDA)の研究員を案内する農地庁技術者(中央の二人)(7/19)。



写真4.  
ラ・ルイサ入植地の真中にあるパッション・フルーツの畑。ラ・ルイサ・プリエタの誰かが植えたのであろう。サトウキビの跡地にパッション・フルーツを植えることができることを証明している(7/19)。



写真5.  
鹿児島県の南日本放送の記者の質問に答える農牧開発南部センター(CESDA) Tomás Montás 所長。ラ・ルイサ入植地のパッション・フルーツの畑の前にて。移住者には鹿児島島出身者が多い(7/19)。

## 5) 農地庁個別派遣専門家要請書の作成指導

ラ・ルイサ入植事業は相当に時間のかかる事業である。今から5～6年位すれば、ようやく格好がついてくるのでないか。

ラ・ルイサ入植事業は、ドミニカ共和国における複雑な移住事業を理解した上で、技術協力を組み立てていくという至難の業である。本事業を成功させるためには、長期にわたってフォローするコーディネーターが必要である。農地庁に専門家を送りこんで、この入植事業をコーディネートする必要がある。

農地庁は長官のアドバイザーとして、個別専門家を希望している。ラ・ルイサのモデル入植事業をはじめ、他の入植事業を円滑に推進するためである。

農地庁は1962年以来444の入植事業を実施して、62万haを開発10万家族を入植させた。一方JICAは戦後南米の国々で多くの入植事業を行った経験があり、現在もブラジルで大規模の入植事業を展開している。JICAの入植事業に関するノウハウをドミニカ共和国の同事業に生かすことができる。

入植事業には大きく分けて二つの段階がある。一つは事業地の設計施工というハードの面、もう一つは入植者の営農指導というソフトの面である。農地庁は昨年わが国の無償資金協力により機材供与を受けて、ハードの面は強化され技術協力は必要なしとしている。技術協力を要請しているのは入植者の営農指導というソフトの面である。

営農指導も農業普及員の仕事という狭い意味ではなく、農産物の市場開発も含めた入植事業のマネジメントを指導する専門家を要請している。

農地庁はドミニカ共和国の農業開発に大きな貢献をした。農地庁は全国に13の地方事務所があり全従業員4,700名の大きな機関である。技術系628名、高専卒486名、事務系965名、残り労務者である。個別専門家は農地庁の営農指導がどういう形で実施されているのか分析して、農地庁に対する技術協力を強化していくことができると思われる。

## 6) 施設計画企画調査員の受け入れ体制

8月6日到着予定の施設計画企画調査員を受け入れる準備を行った。農地庁に土木工学と社会学のカウンターパート、さらに測量班2つを依頼した。

同調査員の野外の作業は、コミュニティでのアンケート調査、コミュニティと入植地での測量がある。この作業によって、プロジェクト総額の概算ができる。概算ができれば、対処方針を決定する参考になる。

アンケート調査は、コミュニティの飲料水の確保状況のみでなく、何家族住んでいるのか、家族構成はどうか、収入源、収入レベル、農業をやっているのか、どんな農業をやっているのか、などを調査する。コミュニティの家屋や井戸の分布図をつくり、住民の生活の実態を知る。

いろいろのNGOが入り込んでいるコミュニティである。飲料水の供給、道路と排水路の建設をするにも、コミュニティ参加が必要である。農地庁の

シャル・ワーカーはアンケート調査により、どういう形のコミュニティ参加が望ましいのか提案できると思われる。

アンケート調査は、施設計画だけではなく営農計画にも関係しているので、報告者が担当する。従って、施設計画企画調査員は測量を開始することができる。

## 2. 主な行事や出張など

- 1 1(火)・ラ・ルイサ地区開発に係る連絡協議会（於農地庁）
- 1 3(木)・農牧開発南部センター(CESDA)訪問
- 1 9(水)・農牧開発南部センター(CESDA)所長および研究者とラ・ルイサ地区視察
- 2 8(金)・ラ・ルイサ地区展示圃場に関する打合せ（於 CESDA）

## 3. 関連事項

### 日系移住者の日本政府に対する損害賠償請求訴訟

当地の新聞が日系移住者の訴訟について報道した。（1）リスチン・ジアリオ（日刊新聞）、（2）オイ（今日）、（3）エル・シグロ（世紀）（発行部数の順）のトップ3紙が、以下の見出しで報道した。

- 1) 7月10日「オイ（今日）」紙第1面  
50年後「ドミニカ共和国の日本人は契約不履行として日本政府を起訴」（添付資料5）
- 2) 7月11日「エル・シグロ（世紀）」紙第2面  
抗議>>7月18日東京に出発「ドミニカ共和国の日本人は日本政府を起訴」（添付資料6）
- 3) 7月17日「リスチン・ジアリオ（日刊新聞）」紙第1面  
「コンスタンサの日系人の戦い」50年以上経ってから日本からの移住者はここに捨てられたとして日本政府を起訴（添付資料7）

## 4. 今後の計画、その他

- 1) 「第2回ラ・ルイサ地区開発に係る連絡協議会」開催
- 2) 農地庁個別派遣専門家要請書のフォロー
- 3) 展示圃場の設置
- 4) アンケート調査の実施

以上

## 添付資料 1

### 第 1 回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会議事録

1. 冒頭、農地庁 Juan Vasquez 副長官が挨拶し、本プロジェクトの重要性を強調した。
2. その後、農地庁国際協力課 Enrique Chalas 課長が、農地庁長官が吉井和弘技師、Alfonso Viscaino 学士、Hector Keppis 技師を技術班に指名して、プロジェクトを作成したことを説明した。技術班はラ・ルイサ地区プロジェクトの概要を発表した。
3. その後開発のストラテジーと TOR が議論された。
  - (1) 地区住民の雇用創出：モデル入植事業は地域住民の雇用創出を図るが、生産性を上げるために、地区住民の雇用創出を脅かさない程度に機械化を行う。
  - (2) 地区住民のプロジェクトへの参加：地区住民は地区のインフラ整備に参加するが、モデル入植事業には今の段階では直接には参加しない。モデル入植事業は生産性をあげるために機械化を考慮した近代農業であり、地区住民に技術移転するにはもっと時間をおかなければならない。
  - (3) 灌漑設備の導入：JAD 社の報告書の気象データによると、ラ・ルイサには年間雨量が 2,000mm 以上あり灌漑なしでもできる作物がある。
  - (4) 入植者の組織化と訓練：まず、開発調査によって収益性の高い作物の絞り込みを行う必要がある。その後、入植者の営農計画が決まってから、入植者の組織化と訓練を考慮する。
  - (5) 土壌種類によるデータがすでにあるので、ロット毎の土壌分析は行わない。
4. プロジェクト（案）は、農務省、大統領府技術庁、水利庁、大使館、JICA からなる連絡協議会で承認された。農地庁は外交ルートを通じて大使

館にプロジェクトを提出する。

5. 技術班は、水利庁、大統領府技術庁、農地庁など関連機関の支援により本開発調査の予算を概算し、コンサルタントのリストを作成し、TORを拡充し次の連絡協議会に提示する。
6. 今後、技術班が作業をフォローしその進捗を報告し、関連機関の調整を図るために、連絡協議会を適宜開催する。

以上

第1回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会出席者名簿

Lista de Participantes a la 1ra. Reunión del Proyecto La Luisa  
11 de julio del 2000  
10:00 a.m. - 12:00 m.  
Salón Verde, IAD

NOMBRE	INSTITUCION	CARGO	TELEFONO
1 Juan Vásquez	IAD	Sub-Director	530-6585
2 Enrique Chalas	IAD	Encargado Oficina Cooperación Internacional	530-6585 Ext.285
3 Alfonso Vizcáino	IAD	Asistente División de Planes y Proyectos	530-6585
4 Héctor Keppis	IAD	Asistente de la Oficina de Cooperación Internacional	530-6585 Ext.285
5 Luz Belkis Pérez Baquero	STP, Sub-Secretaría de la Cooperación Internacional	Asistente de la Encargada de Proyectos	221-5286 & 221-5140 Ext.224
6 Yukiko Haneda	STP	Asesora Japonesa	221-5140 Ext.415
7 Leadro Mercedes	SEA	Sub-Secretario de Investigación	547-1492
8 Hilton E. Castillo	INDRHI	Ingeniero Civil	532-3271
9 Hisashi Takagi	Embajada del Japón		5673365/67
10 George Takata	Embajada del Japón		5673365/67
11 Atsushi Takeuchi	JICA	Sub-Director	682-4703
12 Kazuyoshi Ishii	JICA	Consultor	682-4703

## MINUTA DE LA 1RA. REUNION DEL PROYECTO LA LUISA

1. El Ing. Juan Vásquez, Sub-Director del IAD, dió inicio a la reunión y destacó la importancia del Proyecto.
2. El Lic. Enrique Chalas, Encargado de la Oficina de Cooperación Internacional del IAD, informó que el Director del IAD designó un equipo técnico integrado por: el Ing. Kazuhiro Yoshii, el Lic. Alfonso Vizcaíno y el Ing. Héctor Keppis para la formulación del Proyecto. Este equipo presentó un esbozo del perfil del "Proyecto La Luisa".
3. Los temas tratados fueron: Estrategia de Desarrollo y Términos de Referencia.

### 1) Empleo de Mano de Obra.

El Proyecto contempla un uso de mano de obra intensivo, sin embargo se hará la mecanización de las labores en determinados rubros para obtener una mayor rentabilidad.

### 2) Participación de la Comunidad.

En esta fase se efectuará la integración de los moradores de la comunidad en las obras de infraestructura, pero no participarán de manera directa en las actividades productivas del asentamiento modelo, en razón de que la agricultura a desarrollar es altamente tecnificada y deberá esperarse algún tiempo para lograr la transferencia tecnológica a los moradores de la comunidad.

### 3) Sistema de Riego.

Según los datos meteorológicos recopilados por el informe de la JAD, La Luisa recibe más de 2,000 mms. de lluvia anual, lo cual permite la producción de algunos rubros sin riego.

### 4) Organización y Capacitación de los Parceleros.

En esta fase se definirán los rubros a producir, lo cual permitirá diseñar un modelo de organización y capacitación para ejecutar en la próxima etapa.

5) Se descartó realizar análisis de suelo por parcela, ya que ya se tienen los datos por categoría de suelo.

4. El Proyecto fue aprobado en la reunión del equipo interinstitucional integrado por: la Secretaría de Estado de Agricultura (SEA), el Secretariado Técnico de la Presidencia (STP), el Instituto Nacional de Recursos Hidráulicos (INDRHI), la Embajada del Japón, la Agencia de Cooperación Internacional del Japón (JICA) y el Instituto Agrario Dominicano (IAD).

El IAD tramitará el Proyecto a la Embajada del Japón por los canales correspondientes.

5. En la próxima reunión, el equipo técnico presentará el valor aproximado del costo de la realización del estudio tanto como la lista de los consultores y se fortalecerán los términos de referencia con el apoyo del INDRHI, del STP, del IAD y otras instituciones involucradas.
6. El equipo técnico dará seguimiento a los trabajos y presentará el avance de los mismos en las reuniones interinstitucionales que serán convocadas oportunamente.

別添資料2.

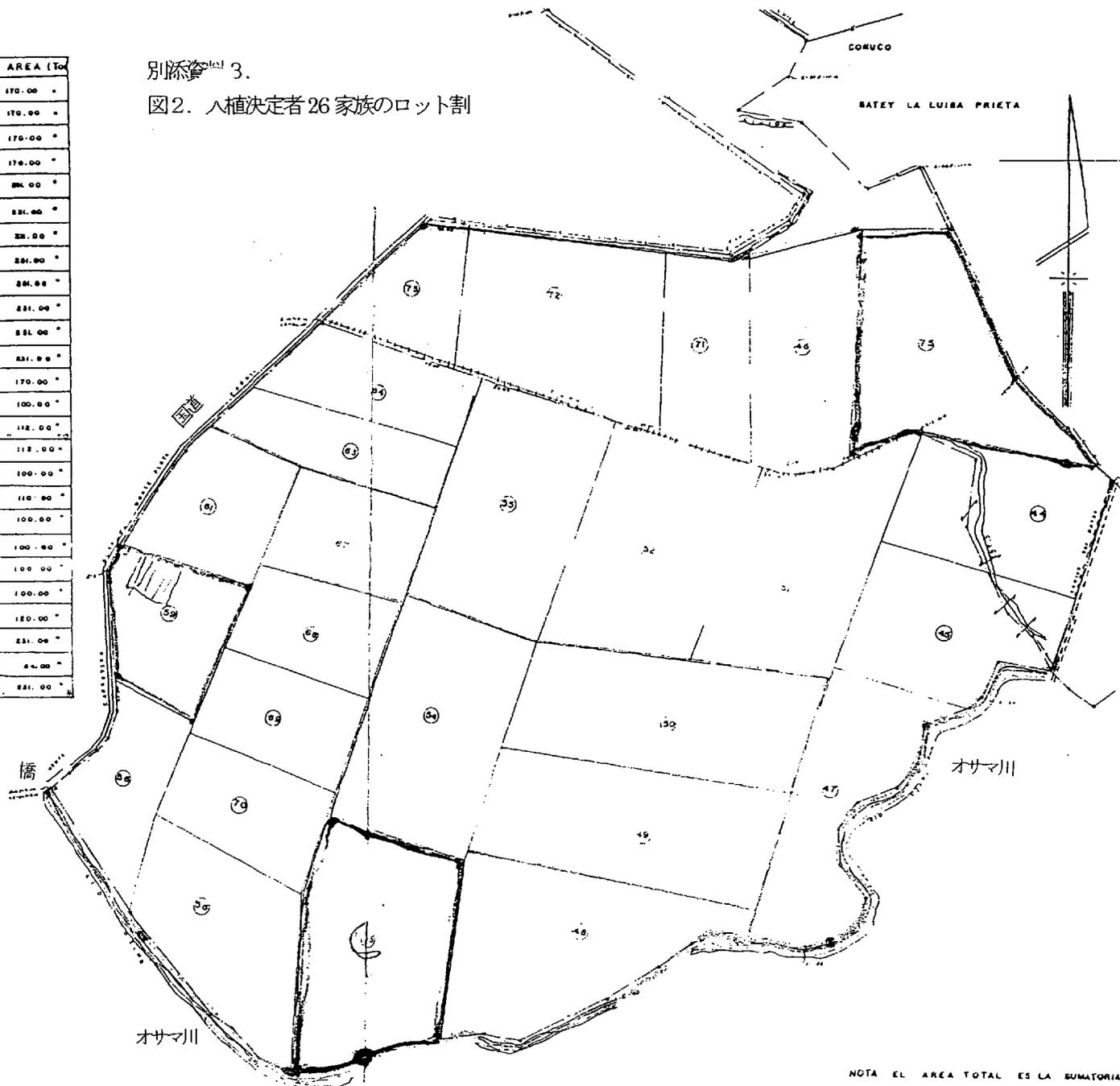
図1. ラ・ルイス入植地全図



P. No.	Ocupantes	Lugar	Area (To)
44	IMAO HOSAI	VILLA ALTAMACIA	170.00 *
45	KYOKO MIKAMI	" "	170.00 *
46	TATEMIKO SETO	" "	170.00 *
47	TACHIKO YOKUSA	" "	170.00 *
48	NAKANISHI YAMASHITA	DAJABON	201.00 *
49	TAKAYORHI NAKAHARA	"	231.00 *
50	FUJIO KAMATSU	"	221.00 *
51	CHITO KAWASHIRO	"	221.00 *
52	YOSHICAZU HIROMITSU	"	221.00 *
53	TATSUKICHI YANAI	"	221.00 *
54	MIYUKI YOKTA	"	221.00 *
55	TAKEO MASUOKA	"	221.00 *
56	AYAKO NINO	V. ALTAMACIA	170.00 *
58	SUREMU NUBATA	CONSTANZA	100.00 *
59	MASUHIKO KAI TO	AGUAS NEGRAS	112.00 *
61	NAJINE TABATA	" "	112.00 *
62	MAZUO SONE	CONSTANZA	100.00 *
64	HIME FUSURAGA	SUYRBE	110.00 *
67	HITOSHI WAKI	CONSTANZA	100.00 *
68	MASAMITSU HISAPA	"	100.00 *
68	KOREI HISHIU	"	100.00 *
70	FUMIKORI YAJIMA	"	100.00 *
71	Sra. MARCO NINDE	V. ALTAMACIA	120.00 *
72	Sra. SONDOKI KATO	DAJABON	231.00 *
74	MIYU SASAKI	"	24.00 *
75	Sra. ZENUCIMON YAMAPI	"	221.00 *

別添資料 3.

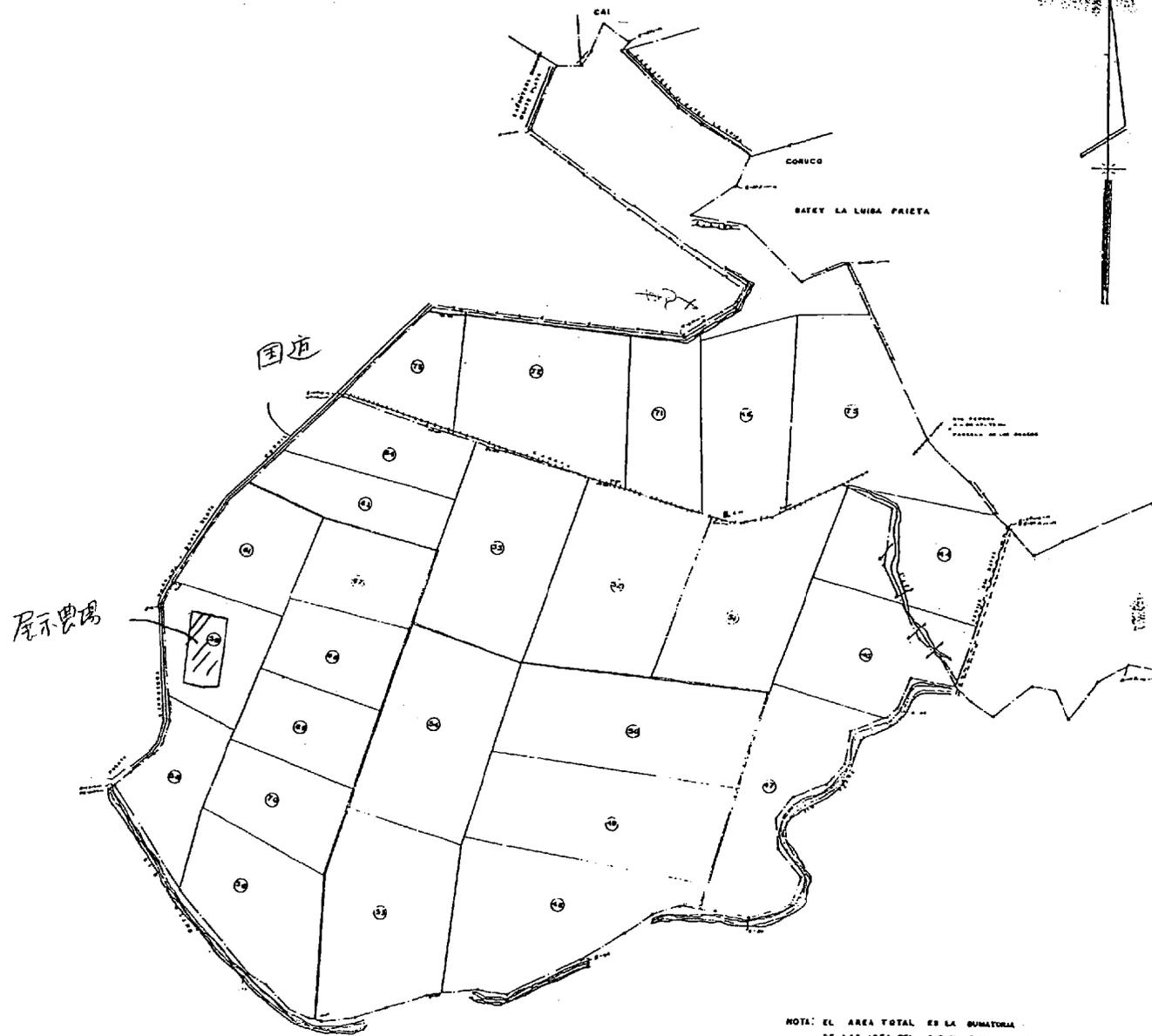
図2. 入植決定者26家族のロット割



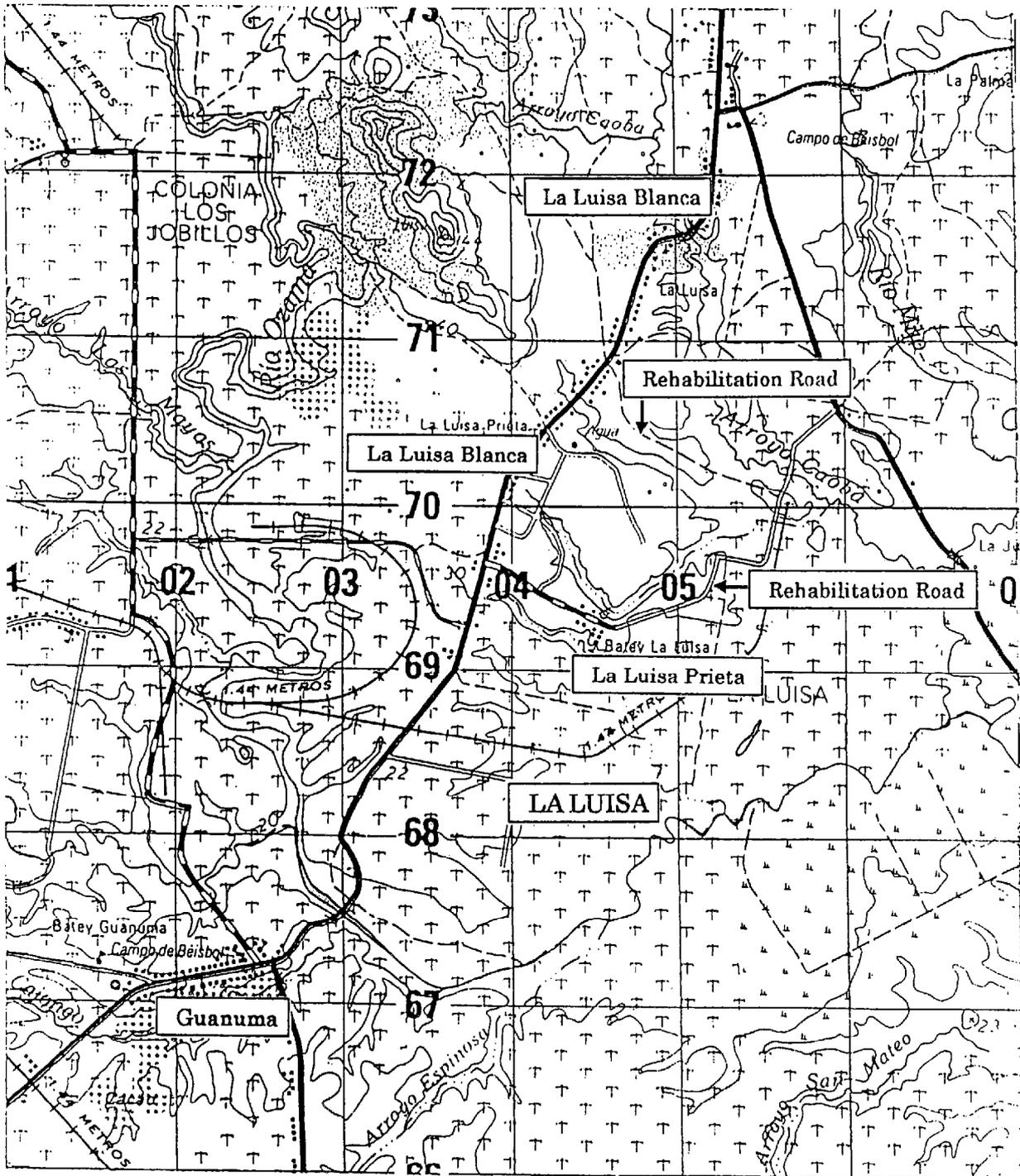
NOTA EL AREA TOTAL ES LA SUMATORIA DE LAS AREA DEL P.-U.-M., P.-U.-M Y P.-

N.º	OCCUPANTES	LUGAR	AREA (m <sup>2</sup> )
11	INAO OKADA	TALA ALBUQUERQUE	776.00 *
12	YUSUO NIKUMI	"	480.00 *
13	TATSUMIKU SETO	"	470.00 *
14	TAKEMO YOSHIDA	"	170.00 *
15	HASAHARA YAMASHITA	SANJOSON	50.00 *
16	TAKAYOSHII HANABUSA	"	50.00 *
17	FUJIO KENKICHI	"	50.00 *
18	CHIKO SANABASHI	"	50.00 *
19	YOSHIZAKI SHIGEMITSU	"	50.00 *
20	TATEMUCHI TAKAI	"	50.00 *
21	MIYOSHI YASUDA	"	50.00 *
22	TAKEDA MASUDA	"	50.00 *
23	AYANO NIKO	V. SANJOSON	170.00 *
24	SHIMIZU MURATA	COMTANEA	100.00 *
25	MASUMIYA KAITO	ARRAS HERAS	110.00 *
26	NAJIMA TAKATA	"	110.00 *
27	SASAKI OHSU	COMTANEA	100.00 *
28	MIKI FUKUDA	REVERDE	100.00 *
29	MITSUHI WAKI	COMTANEA	100.00 *
30	MASAMITSU HIRATA	"	100.00 *
31	KUROKI HIRANO	"	100.00 *
32	FUKUMORI TAKEDA	"	100.00 *
33	DR. MAKINO HISAO	V. ALTAMIRAS	100.00 *
34	DR. OKADA KAZU	SANJOSON	50.00 *
35	MIYOSHI SASAKI	"	50.00 *
36	DR. ZENZOYAMA TAKAI	"	50.00 *

# ASENTAMIENTO LOS JAPONESES



NOTA: EL AREA TOTAL ES LA SUMATORIA DE LAS AREAS DEL P-10-M, P-11-M Y P-12-M  
 1- TRAPAGADA DEL C.E.A. AL I.A.S. MEDIANTE OFICIO No. DE FECHA.



Ubicación del Area de Proyecto

添付資料4.

7月10日「オイ（今日）」紙第1面

50年後「ドミニカ共和国の日本人は契約不履行として日本政府を起訴」

1950年代の終わりにわが国に来た日本人移住者は、ドミニカ政府と結んだ契約を履行しなかったとして日本政府に対して訴訟を始めた。

日本政府が海外移住家族の人権を侵害したかどうか判断するために1991年から調査を行っている弁護士団の代表がわが国を訪れている。

日本政府に対して訴訟を開始する人権の弁護士団は、人権保護委員会に属する。ニシダ・ケンシ、カンド・ショイチ、オヌマ・カツコ、イシカワ・ヒサシ、ハマダ・フユキ弁護士が日系移住者の市民代表の一部である。

独裁政権者ツルヒヨと日本政府との協定に従って、ドミニカのいろいろの地域に東洋人家族を入植させるべく最初の移住者が1956年7月26日にわが国に到着した。このことをマヌエルという名前で洗礼を受けたヨシアキ・カサハラはよく覚えている。

これらの家族に条件のよい300タレアの土地、農機具、技術指導が約束されていたのだと説明した。

カサハラ氏は、1956—1959年にドミニカ共和国に286家族が移住してきたが、日本人入植地と言われた事業地の土地の条件は悪く、移住者は約束が違うという理由でこの国を離れなければならなかった。

最初の家族はダハボンのラ・ビヒアというところに入植したのを覚えている。モンテクリスチのツヴェルへ、ペデルナレス、ハラボカ、コンスタンサ、ハラバコア、マンサニヨに入植地があった。「基本的に日本政府は、これらの家族に最適なインフラの整備された、すぐに耕作のできる300タレアを約束したのです。」とカサハラは主張した。

「独裁者ツルヒヨが指揮していた当時のドミニカ政府は、日本政府に家族あたり300タレアまでを与えると言った。300タレアをそれぞれの家族に分配するというのではなかった。」といった。こういう状況で多くの家族はたったの50タレアの、また非常にやせた土地を受け取ったのですと説明した。

「移住家族のうち80%以上がこの国を離れ、日本に帰ったり南米の国々に再移住したりした。」とドミニカ共和国在住日系移住者のスポークスマンは語った。日本人入植者は、1950年代の終わりに耕作し始めた土地の所有権を受け取ることはなかったと言う。

入植地が全く崩壊してしまったのは、耕作する土地の条件がよくなかったためであった。

「ツヴェルヘでは1家族だけが残し、ペデルナレスでも1家族だけが残し、ばらばらになってしまった。ダハボンのラ・ビヒア入植地では、2, 3家族が残っただけだった。コンスタンサとハラバコアではもっと多くの家族がいるといえるが、それほど多くもない。」とカサハラは言う。

訴訟は今年18日東京で起こされ、日系移住者は日本政府が40年以上も前した約束を果たしてくれるよう願っている。

#### <移住地>

日本人移住者は、独裁者ツルヒヨの「国境入植」政策のもとに、この国に受け入れられた。

その上、第二次世界大戦の直後で戦争で起こった経済危機による国内圧力を軽減する必要があり、日本は多くの家族を世界のいろいろの地点に送り出し始めた。

最初の家族はダハボンに送られ、「ドミニカ共和国への日本人移住」という本の中で、歴史家アルベルト・デスプラデルはこの国境の町の住民は外国人を大喜びで受け入れたと書き留めている。

「歓迎の後、ダハボンから10km離れた入植地に向かって出発する前に、町の役員に伴われて、町のメイン・ストリートを歩いた。」と歴史家デスプラデルは書いている。

当時の新聞は、「移住者は、広い住み心地のよい他の入植地で建設されたのと同じようなタイプの30戸の家に住んだ。」と報道している。

「これらの入植者に当初予定されていた肥沃な9000タレアのうち、3000タレアを準備して1家族あたり100タレアずつ与えられた。入植者が開発能力に従って500タレアまで拡張することができるという計画であった。」と公文書に書いてある。

デスプラデルの「ドミニカ共和国への日本人移住」という本には、農業移民だけでなく、モンテクリスチのマンサニヨ湾には漁業移民もあったという情報がある。

そこにはタチロウ・カワバタ、キキゾ・マツナガ、ホシゾ・ハギハラ、スミオ・モリヤマ、キンスカ・フクトクが移住した。アフリカ丸に乗ってそれぞれの船をもってやってきたのである。

了

# HOY

RDS8.00 AÑO XIX NO. 5610  
<http://www.hoy.com.do>

LUNES 10 DE JULIO DEL 2000, SANTO DOMINGO, REPÚBLICA DOMINICANA  
138 PÁGINAS EN EL NORTE Y 134 PÁGINAS EN EL RESTO DEL PAÍS

## 50 AÑOS DESPUÉS

# Japoneses de RD demandan a su gobierno por incumplir un acuerdo

**POR JOSE RIVAS**  
*Redactor de Hoy*

Inmigrantes japoneses que fueron traídos al país a finales de la década del 1950 iniciaron una demanda contra su gobierno, acusándolo de incumplir los acuerdos suscritos con el Estado dominicano.

En el país hay una delegación de abogados de Tokio que trabajó desde el 1991 para determinar si el Estado de Japón violó los derechos humanos de las familias extranjeras.

Los profesionales del Derecho

## Los japoneses fueron traídos al país para trabajar en agricultura

que incoarán la demanda ante el Estado de Japón están agrupados en el Comité de Protección de los Derechos Humanos.

Los doctores Nishida Kenshi, Kando Shoicho, Onuma Katsuko, Ishikawa Hisashi y Hamada Huiyuki, forman parte de la representación civil de los inmigrantes japoneses.

Yoshiaki Kasahara, bautizado en el país con el nombre de Manuel, recordó que el primer grupo llegó al país el 26 de julio del 1956, luego de acuerdos entre el dictador Trujillo contra el gobierno de Japón, para asentar a las familiares orientales en diferentes zonas del territorio dominicano.

Explicó que a esas familias se le prometerieron 300 tareas y tierras en óptimas condiciones, así como entrega de herramientas y asistencia agropecuaria.

**Página 6: Japoneses...**

## VIENE DE LA PRIMERA PAGINA

# Japoneses...

El señor Kasahara sostuvo que en esa ocasión, entre el 1956 y 1959, llegaron a República Dominicana 286 familias, pero las pesimas condiciones de las tierras de las colonias, como se le llamaba a los asentamientos de japoneses, los inmigrantes tuvieron que abandonar el país por el incumplimiento de las promesas.

Recordó que las primeas familias fueron asentadas en la comunidad de La Vigía, en Dajabón. Existieron colonias en Duvergé, Pedernales, Jaraboca, Constanza, Jarabacoa y Manzanillo, en Montecristi. "Fundamentalmente, el gobierno japonés prometió a estas familias, que se les iba a entregar 300 tareas, con todas las infraestructuras adecuadas, para el cultivo inmediato de esos terrenos", sostuvo Kasahara.

Indicó que "el entonces gobierno dominicano, encabezado por el dictador Trujillo, le dijo al gobierno japonés, que iba a entregar a cada familia hasta 300 tareas, no que iba a repartir 300 tareas a cada familia". Explicó que ante esa situación muchas de las familias alcanzaron recibir sólo 50 tareas y de muy mala calidad.

"De las familias inmigrantes más del 80 por ciento abandonó el país, retornando a Japón, o radicaron a naciones de la región", sostuvo el vocero de los nipones, residentes en República Dominicana. Dijo que los japoneses asentados nunca recibieron los títulos de propiedad de los terrenos que comenzaron a cultivar a finales de la década del 1950.

Manifestó que el desmembramiento de las colonias, en su totalidad, se debió a que las condiciones para trabajar la tierra no eran favorable.

"En Duvergé sólo quedó una sola familia, en Pedernales a una también, y se han dispersado. En la colonia de La Vigía, en Dajabón, sólo quedan dos o tres familias, y donde más se puede decir que hay familias en Constanza y Jarabacoa, pero no en una cantidad considerable", señaló Kasahara.

Indicó que la demanda será presentada en Tokio

el 18 de este mes y los inmigrantes aponoses esperan que las autoridades del Estado Nipón cumplan con las promesas hechas hace más de 40 años.

## LAS COLONIAS

Los inmigrantes japoneses fueron aceptados en el país bajo la política de "Colonización de la Frontera", aplicada por el dictador de Trujillo.

Además, luego de la Segunda Guerra Mundial, Japón necesitaba disminuir la presión interna ocasionada por la crisis económica provocada por la guerra y comenzó a enviar a distintos puntos del mundo cientos de familias.

Las primeras familias fueron enviadas a Dajabón, y según recoge el historiador Alberto Despradel en su libro: "La Migración japonesa hacia la República Dominicana", los habitantes de esa ciudad fronteriza recibió con muestra de regocijo a los extranjeros.

"Después de la salve, los inmigrantes, antes de iniciar la partida hacia la colonia, situada a 10 kilómetros de Dajabón, recorrieron las principales calles de la ciudad, acompañados de las autoridades", sostiene el escritor Despradel.

Los periódicos de la época publicaron que "los inmigrantes han sido alojados en 30 casas amplias y cómodas de asbesto-cemento, del mismo tipo de las construidas en las demás colonias".

"De las 900 tareas fértiles que en principio se han destinado para estos colonos, han sido preparadas 3,000, de las cuales se les ha entregado 100 tareas a cada jefe de familia, con el propósito de aumentársela hasta 500, según la capacidad de trabajo desarrollada por los poseedores", sostienen documentos oficiales.

En el libro: "Migración japonesa hacia la República Dominicana" de Despradel, se recoge la información que no sólo vienen familias agricultores, sino que también hubo colonias de pescadores en la bahía de Manzanillo en Montecristi.

Allí fueron instaladas cinco familias: Taichiro Kawbata, Kikizo Matsunafa, Hoshizo Hagihara, Sumio Moriyama y Kinsuka Fukutoku, las cuales viajaron acompañadas de sus respectivas embarcaciones pesqueras, transportadas a bordo del barco Africa-Marú.

添付資料 5.

7月11日「エル・シグロ（世紀）」第2面

抗議>>7月18日東京に出発

「ドミニカ共和国の日本人は日本政府を起訴」

日本人会会長、日系移住者のスポークスマン、ヨシアキ・カサハラは、7月8日約150名の原告が東京で行われる日本政府を訴える裁判に出席すると発表した。50年代にドミニカ共和国に来た日系移住に関連して日本政府が契約不履行、うそ、虚偽および過失罪を犯したというのである。

この外人は、始めは日本政府に対して犯した誤りに対して謝罪を求めただけであったが、受け入れられなかった。これは一種の切腹をするようなもので自己の過ちを認めることになるからであるという。

かくして、この最後の手段に至るまでに移住者は、賠償金、年金、医療保険といったような余生の経済的な保障を交渉したがうまくいかなかった。移住者は年令70-80に達し耕作するための新しい土地をもう要求することができないからである。

1954年、衆議院議員ツカサ・ウエツカらの力により日本政府は、ドミニカ共和国に日本人移住者を受け入れるようにもちかけた。「日本の人口過剰の状況を大きく軽減する」のが目的であった。第二次世界大戦後の極東のこの国が直面していた深刻な経済、社会、政治的問題の解決を探るのにドミニカ共和国が移民を受け入れて貢献するということを意味したのである。

当時のドミニカ共和国農務大臣ファン・パブロ・デュアルテは、在ドミニカ共和国日本大使館シゲヨシ・フクシマ通商代理に宛てた手紙で、「わが国は農作業をするのに十分な土地、適度な住まい、最初の作付けに必要な種、農作業を始める農具、さらに加えて教育と衛生サービスを入植者に供与する。」と述べている。

ドミニカ共和国農務大臣は計画がうまくいくためには、プロジェクトを100家族を基盤にして開始し、25家族ずつの4つのグループにおいて4箇所違った場所で始めるのがよいと考えた。

ヨシアキ・カサハラは最初のグループは1956年7月26日にこの国に到着した。ドミニカ共和国と日本政府の間の公式移民協定の結果でもなかった、という日本政府関係者の第一の過ちであった。しかしながら、日本ではすべて準備が整っていて家族あたり300タレアの土地が与えられ、ドミニカ共和国をカリブ

の学園と呼んで、土地には直ぐに耕作のできるインフラがあると思わせたその結果なのである。

同じように、電気、飲料水や他の設備のついた家屋を供与すると約束した。同時に、土地は大変肥沃で日本では年1回とれるだけの米が年3回も収穫できると言われた。多くの人にはこれは人生の機会であると考え、もっていたすべての財産を売り払ってドミニカ共和国にもってくる農具を購入した。

カサハラはドミニカ政府も日本政府も移住を動機つける魂胆があったと理解している。日本政府は第2次世界大戦の後の国内の圧力を少し緩和したかったし、ツルヒヨはハイチ人の静かな侵入を防ぐために国境に安全地帯をつくり黒人でない人種を住ませようとしたのである。

移住者のスポークスマンはドミニカ共和国に移住するために家族あたり15万円を支払わなければならなかった。主な経費を賄うためであった。この国に着いてから、日系移住者はダハボンのラ・ビヒアというコミュニティに連れて行かれたのである。

「そこに着いたときには、ほんとうにがっかりしたものでした。第一、灌漑システムは適当なものでなく、そこにあった土地面積を冠水する能力がなかったのです。第二に、それぞれの家族に渡すようにはロット割がしてありませんでした。その結果、嫌気がさしてきました。ロットが分割されておらず、どうしてよいかわからなかつたからです。」

了

# EL SIGLO



SECCION A RD\$8.00 AÑO 12, NO. 3548 MARTES 11 DE JULIO DEL 2000 SANTO DOMINGO, REPUBLICA DOMINICANA



## Codia somete a Diandino a SCI

El Codia sometió ayer a la justicia al secretario de Obras Públicas, ingeniero Diandino Peña, a quien acusa de sobrevaluación de obras del Estado y adjudicación irregular de contratos.

POLITICA DD 11A



## Taxistas demandan loc

Los taxistas de las "unidades amarillentamente desde España, se quejan de se para operar y ofertar su servicio ;

CAPITAL DD SECCION B

RECLAMO **»** Viajarán a Tokio el 18 de julio

## Inmigrantes japoneses en RD demandan su gobierno

**»** Juan de la Cruz/ELSIGLO

Yoshiaki Kasahara, secretario general de la Asociación Nacional de Japoneses (Asonaja) y vocero de los inmigrantes japoneses, anunció que el próximo 18 de julio alrededor de 150 demandantes asistirán al juicio que se realizará en Tokio contra el gobierno japonés ante los incumplimientos, mentiras, falsedades y errores cometidos por éste en relación a la migración japonesa de la década de los '50 hacia la República Dominicana.

El extranjero indicó que al principio lo único que le solicitaron al gobierno japonés fue tan sólo una disculpa por los errores cometidos, a lo cual no accedió, por entender que eso era una especie de "jariquiri" o autoaniquilamiento.

Asimismo, antes de llegar a ese recurso supremo los inmigrantes intentaron negociar cierta seguridad económica para el resto de sus días, como una indemnización, una pensión y un seguro médico, ya que la edad avanzada que tienen, entre 70 y 80 años, no les permite demandar nuevas tierras para trabajarlas.

En el año 1954, el Estado japonés, a través del legislador Tsukasa Uyetsuka y otros funcionarios, hizo gestiones ante el gobierno dominicano para que este acogiera migrantes de su país con el fin de "aliviar considerablemente la si-



**Yoshiaki Kasahara**

tuación de exceso de población del Japón", lo que implicaba que la apertura dominicana contribuiría a buscar solución a serios problemas económicos, sociales y políticos que vivía esa nación del Extremo Oriente después de la Segunda Guerra Mundial.

En la ocasión, el secretario de Agricultura de la República Dominicana, Juan Pablo Duarte M., en carta dirigida al encargado de Negocios Ad Interim del Japón en el país, Shigeyoshi Fukushima, le manifestó: "Nuestro gobierno podría concederles tierra en cantidad suficiente para sus labores agrícolas, una casa-vivienda adecuada, las semi-

llas que necesiten para sus primeros cultivos, implementos de labranza para iniciar sus labores y, adicionalmente, servicios educativos y sanitarios".

El secretario de Agricultura dominicano entendía que para garantizar el funcionamiento adecuado del plan era "conveniente iniciar el proyecto a base de un número de 100 familias, las cuales serán divididas en 4 grupos de 25 familias cada uno, y ubicadas en 4 lugares distintos".

Yoshiaki Kasahara expresa que el primer grupo de inmigrantes arribó al país el 26 de julio de 1956, sin que fuera el resultado de un acuerdo migratorio oficial entre los gobiernos dominicano y japonés, lo que considera el primer error cometido por las autoridades de su país. Pero que, sin embargo, les hizo entender a los reclutados en Japón que todo estaba arreglado y que se les iba a entregar 300 tareas de tierras a cada familia con toda la infraestructura necesaria para la producción inmediata de esos terrenos en el "paraíso del Caribe", como bautizaron a la República Dominicana.

Igualmente se le prometió que se le iban a entregar viviendas con energía eléctrica, agua potable y otras facilidades. Al mismo tiempo se le dijo que las tierras eran tan fértiles que se podía cosechar arroz tres veces al año, cuando en Japón sólo se podía cosechar una sola vez. Eso llevó a mu-

chos a entender que esa era la oportunidad de sus vidas y vendieron todo los bienes que tenían y compraron algunos aperos de labranza para traerlos a República Dominicana.

Kasahara entiende que los gobiernos dominicano y japonés tenían sus intenciones al motivar esa migración. El gobierno japonés quería descongestionarse un poco de la presión interna que tenía después de la Segunda Guerra Mundial y Trujillo para hacer un cordón sanitario en la frontera para impedir la supuesta invasión pacífica de los haitianos, con el fin de poblar esa parte con personas que no fueran negras.

El vocero de los inmigrantes reveló que cada familia debió pagar 150,000 yens para poder embarcarse hacia la República Dominicana, y así cubrir los principales gastos. Ya en el país, los inmigrantes nipones fueron llevados a la comunidad de La Vigía, Dajabón.

"Llegaron allí y se llevaron una decepción tremenda. Primero, porque el sistema de reguío no era el adecuado, no tenía la capacidad para irrigar la cantidad de terreno que allí había. En segundo lugar, porque no estaban ni divididas las parcelas para entregárselas a cada familia. Esto trajo como consecuencia un disgusto, porque al no estar divididas o lotificadas las parcelas, nadie sabía qué iba a hacer.

## 添付資料 6.

7月17日「リスチン・ジアリオ（日刊新聞）」紙第1面

「コンスタンサの日系人の戦い」50年以上経ってから日本からの移住者はここに捨てられたとして日本政府を起訴

### 失われた年月を回復する戦い

期待：50年以上経ってから日系移住者のグループはドミニカ共和国に来たときに日本政府がした約束を守ってくれるように期待している。（写真：日本政府を訴える移住者家族の弁明に聞き入るケンシ・ニシダ弁護士）

ここについては、アメリカはぴったりだという考えを抱いていた。1年中よい気候を楽しみながら作物に適した肥沃な土地が得られるという機会に釣られて未来を求めて海を渡って来たのである。ほとんどの移住者は独裁者ラファエル・レオニダス・ツルヒヨ・モリナについて漠然としたアイデアしか持っていなかった。つまり、経済的な移民者だったのである。計278家族が、米国の原子爆弾で8月15日に終了した第二次世界大戦後の日本の貧困を逃れてやって来たのである。

50年以上たってから、わが国に残った人々とその後継者は日本政府に対して約束不履行とこの年月に直面した経済的困難に対する補償を求めて訴訟を起こした。東京の裁判所で50以上の移住者家族が18日火曜日に起こす訴訟は勝つ可能性が高いとケンシ・ニシダ弁護士は言う。彼は人権侵害であるという。

ツルヒヨ独裁政権の頃にわが国にやって来た日本人は、1948年8月25日の入植事業に関する政令1783によって保障されている。農務省が適用したこの政令は、譲渡した土地の所有権は10年経ってから与えることになっていた。しかし、これは実行されなかった。更に、1960年から農業入植地は農地庁が管理することになり、行政府の許可がなければ土地の売買や移管ができないという規則に従うことになった。

### ツルヒヨの崩壊は日系移住者の将来に不安をもたらす

写真1. 日本政府は国際協力の一部としてドミニカ共和国に重要な貢献をした。コンスタンサの谷の入り口にある灌漑プロジェクトの看板。

写真2. コンスタンサの日系人は団結を保っている。数十年前からこの公民館に集まる。

## ツルヒヨの移住政策

日本人移住は、衆議院外交委員会会長のツカサ・ウエツカがツルヒヨと交渉を始めた1954年10月に遡る。このように、「ドミニカ共和国への日本人移住」という本の中で、歴史家アルベルト・デスプラデルは説明している。

一方、歴史家ロベルト・カサはツルヒヨ政権の日本人や他の国籍の農家の移住プロジェクトは計画の不足から失敗したと結論している。「この入植の試みが成功しなかったのは、よく準備がされておらずその上国が圃場での仕事の支援、知識やシステムの更新について本当に必要な事項を把握していなかったからである。」

ツルヒヨの以前から、ドミニカ政府は先進国から移住を受け入れる計画があり、わが国は人口が不足していて開発に貢献するような外国人が必要であると考えていたのであるとカサは説明する。

「ツルヒヨはこの意味で実行したのである。この目的の資金があり経済が順調に成長していた時に、これらの計画が実施されたのである。これは1930年代の終わりにドイツの崩壊でわが国にやって来たユダヤ人やドミニカの機関から旅費や補助金の支援をえてやって来たスペイン人のケースのようなものである。」

歴史家は全てのこれらの試みは断然失敗したと決め付ける。コンスタンサには日本人やスペイン人の到来によって農業の躍進があったが、ツルヒヨの独裁政権は躍進が適切なものになるような条件をつくったからであったと付け加えた。

.....

これはツルヒヨの崩壊と同じく移住者の生活に不安感をもたらした。ドミニカ政府が約束しただけの土地を譲渡しなかったほかに、ツベルへ、ネイバ、ダハボンの入植事業があったところには耕作できる条件が揃っておらず、中でも水が不足していた。ハラバコア、あるいはコンスタンサに入植した人は一番運がよかったが、それでも最初の収穫にそなえて困難に直面したのである。

最初は、家族あたり一日60セントがぶつ受け取っていた。これで小農場で生産があがるまで食っていたのであった。しかし、独裁政権が崩壊して苦しい逆境に陥り不安な日々を送り始めたのである。これを母国で始めた訴訟によって終止符をうちたいと願っている。

### 幼年時からの労働者

1956-1959年にわが国に到着した日本人の証言は感動されるものがある。多く的人是譲渡された土地をすてて、不安定な経済状態から脱するために他の場所に移らなければならなかった。コンスタンサの日本人会会長テツヤ・タ

カタ（52歳）の両親もそういう風にして、ヅベルへのコミュニティに最初入植したが数年経ってからコンスタンサに移りハンガリー入植地で15タレアを入手したのであった。

ハンガリー入植地の入植者は家屋はあったが土地はなかった。タカタの家族は指導者に働きかけ15タレアを手にしたのであった。その後、60年代の初めに日本人のブラジル、基本的にサン・パウロへの脱出があり47タレアを購入することができて最初に譲渡された土地を返還しなければならなかった。

タカタは52年を振り返って、感慨深く「我々の年齢では少年時代が何かは全くわかっていませんでした。子供の頃には大人の真似をして遊んだものですからね。」両親が日本からヅベルへに入植した時には、彼は日本で勉強を開始していた。こちらに来てスペイン語を全然知らないのに学校で先生に当てられたりした。コンスタンサに移って、小学校の3年生までを終えた。畑仕事が時間をとって勉強を終えることができなかったのである。

時間が経つにつれて、彼の兄はニューヨークに働きに行き、彼の姉は60年代の初めに日本に戻った。しかし、タカタは農業を続けている。彼の父は79歳で母は90歳でなくなった。両親ともコンスタンサの日本人墓地に埋葬されている。10人の子供のうち5人は、日本で日系移住者の子弟のほとんどと同じように人夫として働いている。

「自分はあまり日本では歓迎されない。自分には学歴がない。」とタカタはいう。だが彼の一番心配しているのは両親の母国が彼を受け入れてくれるということではない。つまり彼はドミニカ人と結婚して感情的にコンスタンサに結局つながっているからである。

80年代の始め仮所有権を取得したが、この間恐れを抱いていた。特に「外人から土地を取り上げドミニカ人にあげる」という運動が選挙運動中聞かれた時であった。

#### 公式見解

コンスタンサで先週末行われた面接の間、日本政府を訴える弁護士はタカタの話や地方から申立てをするためにやって来た他の移住者の話に注意深く聞き入った。ケンシ・ニシダはこの案件はもう8年も調査しており、ブラジルのような他の国でも同じような契約不履行の問題があるに違いないと思っている。「公式に在ドミニカ共和国日本大使館は日本政府は責任がない。」と知っているが、訴訟に勝つことができると信じている。

在ドミニカ共和国日本大使館二等書記官ヒサシ・タカイは、訴えの実際の内容

は知らないが、最終決定は日本の裁判所でなされるものだと確言する。「持ち合  
わしているデータによると、日本政府はドミニカ政府の情報に従って移住者に  
出来るだけ多くの情報を与えようとした。しかし、移住者が来てからツルヒヨの  
失墜と国の経済の崩壊で大幅な変更があった。それで、移住者は困難な時期を  
過ごした。日本政府としても移住者が困難に直面したことは周知しているが、  
誰にも責任をとがめることは出来ない。」

大使館のデータによると、ドミニカ共和国には日本国籍の人が467名、2  
00名の日系ドミニカ生まれがいる。もし訴訟に勝てば、ドミニカに来るときに  
約束された土地をすべて手にいれて耕作を始めるための融資も回収することが  
できる。同じようにして、老人は月100-300ドルの年金を受ける可能性がある。  
る。

### ドミニカ政府

アジアの移住者は直面した問題の責任をドミニカ政府に求めている。逆に、  
レオネル・フェルナンデス大統領がモンテ・プラタ県のラ・ルイサ地区に12,618  
タレアを譲渡して状況を解決しようとした方法に不平をもらしている。この処置  
のジェスチャーは、わが国に有利な技術協力、資金協力、無償資金協力の重要な  
プロジェクトを続ける国、日本を喜ばせる試みであるとマモル・ヒダカは見てい  
る。

1999年4月30日ドミニカ外務省は日本政府にフェルナンデス大統領が  
移住者に土地を無償で譲渡する決定をしたと通知した。1998年から当時の農  
地庁長官パイノ・アブレウは、政府がアジアの家族が苦しんだ年月の補償をする  
つもりであると発表し始めた。

「ドミニカ政府に責任はない。日本で政府がダハボンに移住した人に300  
タレアの肥沃な土地といった一連の物を約束したのです。人を口車にのせてだ  
ます目的だったのです。しかし、日本政府の怠慢によりドミニカ共和国とス  
ペインの間で結ばれていた移民協定も結ばれなかったのです。日本外交の過失  
であり、非公式外交書簡の交換に従って協定を行ったのです。」とヒダカは指  
摘する。ヒダカは現在サント・ドミンゴ市で車部品販売の商売を行っている。

今年の2月5日、現在の農地庁長官キルビオ・カブレラ・メナは国内の二  
つの日本人協会の代表と続けてきた会議を中止し、モンテ・プラタの土地は  
希望者の裨益者に与えると発表した。「そこで、以前に土地を受け取ったり、  
公証人役場の証明の書類も持っていない正式の裨益者の仮想の代理人など土  
地を受け取る資格のない人も含めて22家族が現れたのです。2月12日に仮  
所有権が渡されたのです。」

ヒダカの言明によると、農地庁の長官自身が言うには土地の譲渡は大統領が日本の公式訪問の土産として日本にもっていかなければならなかった。公式訪問は2月に行われた。この形で、東京の法廷で始まった期待にあわせて一歩進める一方、モンテ・プラタの土地の分配で移住者は新しい紛争に直面しはじめた。

了

RD\$ 10.00  
CIBAO: 146 PÁGS  
RESTO: 134 PÁGS  
Nº 29.828

# Listin



# Diario

LUNES  
17 DE JULIO DEL 2000  
listin.com.do

AÑO CXI • SANTO DOMINGO

REPÚBLICA DOMINICANA

1889



## MAURICIO BÁEZ, OTRA VEZ CAMPEÓN

El club Mauricio Báez se coronó anoche campeón por segundo año seguido al vencer sensacionalmente a San Lázaro 93-88. **1B**

## LA BATALLA DE LOS JAPONESES DE CONSTANZA

Más de 50 años después, inmigrantes de Japón demandan a su gobierno por haberlos abandonado aquí. **1 y 6C**



## Busque en ESPECTÁCULOS LA TELEVISIÓN DE SANTIAGO SE NUTRE DEL TALENTO LOCAL

Los productos enlatados tienen una presencia mínima en su programación. **18C**



**ESPERANZA.** Más de 50 años después, un grupo de inmigrantes japoneses espera que su gobierno cumpla las promesas que les hicieron cuando vinieron a RD

PANKY CORCINO  
Constanza

Cuando llegaron trajeron la idea de que América les pertenecía. La posibilidad de disfrutar de un clima favorable durante todo el año y de disponer de tierra fértil para el cultivo invitaba a cruzar los mares en busca del futuro. La mayoría tuvo una idea vaga de la dictadura de Rafael Leonidas Trujillo Molina y poco les importaba el régimen de terror imperante en República Dominicana. Al fin y al cabo, eran inmigrantes económicos. Un total de 278 familias huía de la pobreza que vivía Japón tras la Segunda Guerra Mundial, finalizada en agosto de 1945 tras el bombardeo atómico de Estados Unidos.

Más de cinco décadas después los que quedaron en el país y sus descendientes inicia-

rán un proceso legal contra el gobierno para reclamar una indemnización por las promesas incumplidas y las dificultades económicas que tuvieron que enfrentar en todos estos años. La demanda que presentarán más de 50 familias de inmigrantes japoneses en los tribunales de Tokio este martes 18 tiene muchas posibilidades de éxito, conforme al abogado nipón Kenshi Nishida, quien afirma que el caso se inscribe dentro del marco de las violaciones a los derechos humanos.

Los japoneses que vinieron al país durante la dictadura de Trujillo lo hicieron amparados en la Ley 1783, del 25 de agosto de 1948, sobre Colonización. Esta legislación aplicada por la Secretaría de Agricultura les otorgaba, a partir de 10 años, el derecho sobre la propiedad de los terrenos que se les entregaban. Pero esto nunca se cumplió. Además, a partir de 1960 las colonias agrícolas empezaron a ser administradas por el Instituto Agrario Dominicano (IAD), siguiendo una serie de normas que impiden vender o transferir la tierra a menos que el Poder Ejecutivo lo autorice.

**MÁS EN LA PÁGINA 6**

# La batalla

## por recuperar los años perdidos

REPORTAJE GRÁFICO: JORGE CRUZ/ÉSTIN DIARIO



El abogado Kenshi Nishida mientras escucha las declaraciones de una de las familias de inmigrantes japoneses que demandaran a su gobierno.

# La caída de Trujillo llenó de dudas el futuro de los emigrantes del Japón

VIENE DE LA 1

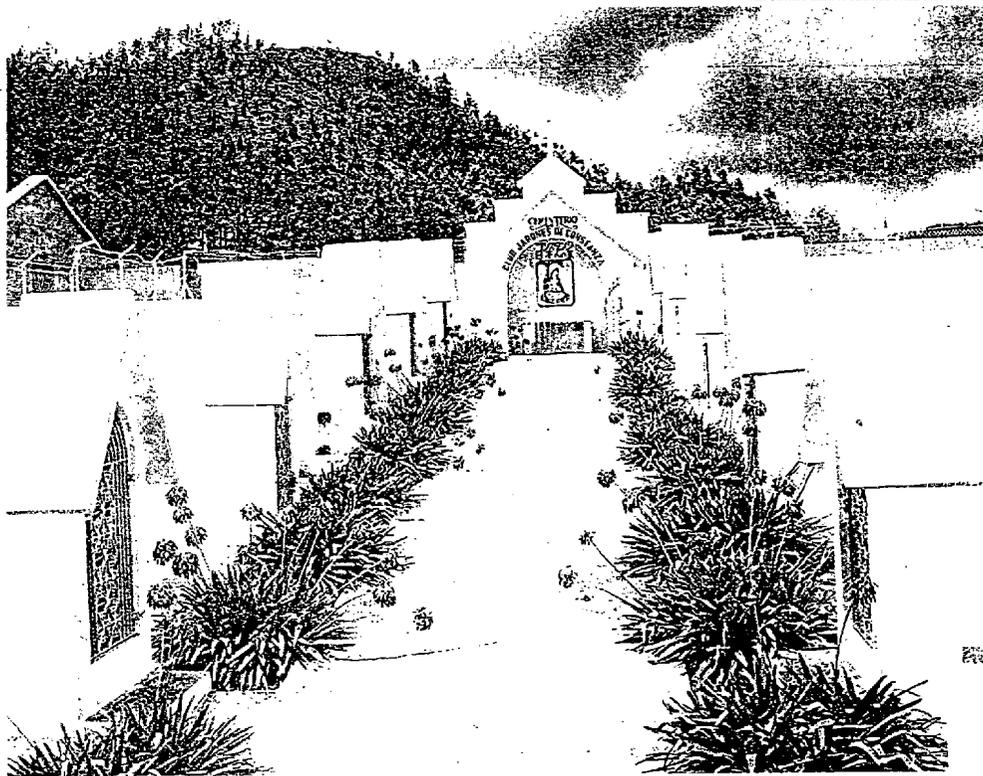
Esto, al igual que la caída de Trujillo, sumó más incertidumbre a la vida de los inmigrantes. A parte de que el gobierno dominicano no le entregó la totalidad de la tierra prometida, en las colonias donde se establecieron localizadas en Duvergé, Neyba y Dajabón no existían condiciones para el cultivo debido sobre todo a la falta de agua. Los que se fueron ubicados en Jarabacoa o Constanza tuvieron mejor suerte, pero también enfrentaron dificultades para preparar las primeras cosechas.

Al principio recibían 60 centavos diarios por familias lo cual les permitía alimentarse hasta que lograran poner a producir sus conucos. Sin embargo, con la desaparición de la dictadura sufrieron un duro revés y empezaron a vivir una etapa de angustia que ahora pretenden dar por concluida con la guerra legal que iniciarán en su país de origen.

## Trabajador desde la infancia

Los testimonios de los japoneses que llegaron al país entre 1956 y 1959 son conmovedores. Muchos tuvieron que abandonar las tierras que se les entregaron y mudarse a otros lugares para poder superar la precaria situación económica. Así lo hicieron los padres del actual presidente del Club de Japoneses de Constanza, Tetuya Takata, de 52 años, quienes al principio se establecieron en la comunidad de Duvergé y años después partieron a Constanza donde lograron conseguir 15 tareas en la Colonia Húngara.

Cuando Takata arribó al país



El gobierno de Japón ha realizado importantes aportes a República Dominicana como parte de la cooperación internacional. Este letrero colocado a la entrada del Valle de Constanza anuncia un proyecto de riego.



REPORTAJE GRÁFICO JORGE CRUZ/LISTIN DIARIO

dificultades en su vida, pero no podemos echarle la culpa a nadie".

En República Dominicana residen 467 personas con la nacionalidad japonesa y 200 descendientes procreados con dominicanos o dominicanas, conforme a los datos de la embajada. Si logran ganar la demanda recuperarán la totalidad de los terrenos prometidos cuando se le propuso venir al país y un préstamo para empezar a cultivarlos. Asimismo, los ancianos tendrán la posibilidad de disfrutar de una pensión que podría oscilar entre 100 y 300 dólares.

## El gobierno dominicano

Los inmigrantes asiáticos no culpan al gobierno dominicano de los problemas que han confrontado. Por el contrario, se quejan de la forma en que el presidente Leonel Fernández ha intentado solucionar su situación ofreciéndole 12,618 tareas en el sector La Luisa, de Monte Plata. Este gesto de la actual gestión es visto por Mamoru Hidaka como un intento de complacer a Japón, nación que mantiene importantes proyectos de cooperación técnica, financiamiento y cooperación no reembolsable que favorecen al país.

El 30 de abril de 1999 la Cancillería dominicana informó al gobierno japonés que el presidente Fernández tomó la decisión de entregar los terrenos a los inmigrantes en forma gratuita. Ya desde 1998 el entonces director del IAD, Paino Abreu, empezó a anunciar que el Estado intentaría compensar los daños sufridos por las familias asiáticas.

"El gobierno dominicano no

lonia Húngara.

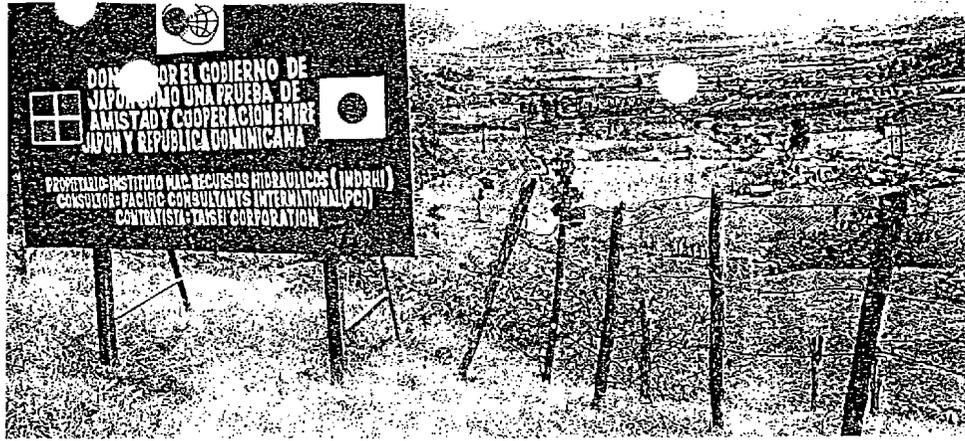
Cuando Takata arribó al país tenía nueve años. Su padre Shizuo Takata era carpintero en el pueblo Mimijara en la provincia japonesa de Kagosima. "Mis padres, mis dos hermanos y yo llegamos a Duvergé en el 57, pero un año después vinimos para Constanza porque estábamos esperando agua para empezar a trabajar". "Y esa agua nunca llegó", añade en tono pausado.

Los habitantes de la Colonia Húngara tampoco tenían tierra pese a que disponían de viviendas. La familia de Takata hizo gestiones con las autoridades y logró conseguir 15 tareas. Más tarde cuando a principio del 60 se inició el éxodo de japoneses para Brasil, básicamente para Sao Paulo, lograron comprar 47 tareas y tuvo que devolver las que le fueron asignadas al principio.

Takata hace una mirada retrospectiva desde sus 52 años y se conmoviona para afirmar que "a la edad de nosotros no sabemos lo que es juventud, porque de niños brincamos a adultos". Cuando sus padres se establecieron en Duvergé él había iniciado sus estudios en su país de origen. Sin saber nada de español lo apuntaron en la escuela. Al trasladarse a Constanza sólo llegaría hasta el tercer curso de primaria. La labranza de la tierra le robó el tiempo de formarse académicamente.

Con el tiempo su hermano se iría a trabajar a Nueva York y su hermana retornó a su país de origen a principio de los 60. Takata, en cambio, sigue cultivando la tierra. Su padre murió en el 79 y su madre en el 90. Ambos descansan en una cripta del cementerio japonés de Constanza. Cinco de sus diez hijos se encuentran radicados en Japón trabajando como obreros al igual que una parte significativa de los descendientes de los inmigrantes japoneses.

"En Japón no me quieren", dice Takata. "No tengo grado". Pero su preocupación principal no es que la patria de sus padres lo vuelva a acoger porque al fin y al cabo se encuen-



Los japoneses de Constanza mantienen la unidad. Desde hace varias décadas se congregan en este club recreativo y cultural.

## LA POLÍTICA INMIGRATORIA DE TRUJILLO

La inmigración japonesa se inicia a partir de octubre 1954 cuando el diputado Tsukasa Uyetsuka, presidente de la Comisión Permanente de Relaciones Exteriores de la Cámara de Representantes de Japón, comenzó a tratar el tema con Trujillo. Así lo explica el historiador Alberto Despradel en su libro "La Migración Japonesa hacia la República Dominicana". Por su parte, el historiador Roberto Cassá afirma que el proyecto trujillista de im-

plementar la inmigración de agricultores japoneses y de otras nacionalidades fracasó debido a la falta de planificación. "Estos intentos de colonización no tuvieron éxito porque no estaban bien preparados y además no daban en el clavo en materia de lo que el país verdaderamente demandaba en materia de aporte, de conocimiento y de renovación del sistema de trabajo en el campo". Cassá explica que desde antes de que el proyecto trujillista de im-

plementar la inmigración de agricultores japoneses y de otras nacionalidades fracasó debido a la falta de planificación. "Estos intentos de colonización no tuvieron éxito porque no estaban bien preparados y además no daban en el clavo en materia de lo que el país verdaderamente demandaba en materia de aporte, de conocimiento y de renovación del sistema de trabajo en el campo". Cassá explica que desde antes de que el proyecto trujillista de im-

plementar la inmigración de agricultores japoneses y de otras nacionalidades fracasó debido a la falta de planificación. "Estos intentos de colonización no tuvieron éxito porque no estaban bien preparados y además no daban en el clavo en materia de lo que el país verdaderamente demandaba en materia de aporte, de conocimiento y de renovación del sistema de trabajo en el campo". Cassá explica que desde antes de que el proyecto trujillista de im-

otros inmigrantes que vinieron de otras partes del país para hacer sus declaraciones. Kenshi Nishida explicó que ya tiene ocho años estudiando este caso y cree que en otros países, como Alemania o los españoles que llegaron con el apoyo de dos instituciones republicanas que le financiaron los viajes y ciertos subsidios". El historiador afirma que en definitiva todos estos experimentos fracasaron. Añade que aunque en Constanza hubo un cierto salto de la agricultura con la llegada de los inmigrantes españoles y japoneses, ya la dictadura de Trujillo había creado desde antes las condiciones para que éste se hiciera propicio.

### La posición oficial

Durante una jornada realizada al final de la semana pasada en Constanza, los abogados que demandarán al gobierno japonés escucharon atentamente la historia de Takata, así como la de

asáticas.

"El gobierno dominicano no tiene la culpa. En Japón el gobierno prometió una serie de cosas como 300 tareas de tierra fértil para los que se radicaran en Dajabón, con la finalidad de engatusar, de engañar a la gente. Pero, por negligencia del gobierno japonés no se firmó un convenio migratorio como el que existía entre República Dominicana y España. Fue un error de la diplomacia japonesa que hizo los acuerdos mediante el canje de notas diplomáticas informales", apunta Hidaka, quien en la actualidad mantiene un negocio de venta de repuestos de vehículos en la ciudad de Santo Domingo.

Hidaka explica que el cinco de febrero de este año el actual director del IAD, Quilvio Cabrera Mena, suspendió las reuniones que venía sosteniendo con los representantes de las dos asociaciones de japoneses que existen en el país y anunció que se entregarían las tierras de Monte Plata a los beneficiarios



Tetuya Takata

que lo desearan. "Entonces aparecieron 22 familias, incluyendo personas que ya no tenían calificación para recibir la tierra porque la habían recibido antes, así como a supuestos representantes de legítimos beneficiarios que no llevaron ningún documento notariado.

El día 12 de febrero se le entregaron los títulos provisionales".

Conforme a las declaraciones de Hidaka el propio director del IAD le dijo que la entrega de los terrenos se hacía porque el presidente Fernández debía llevar consigo un regalo al gobierno de Japón en su visita oficial a esa nación, la cual se produjo en febrero pasado. De esta forma, con la distribución de las tierras de Monte Plata los inmigrantes empezaron a enfrentar un nuevo conflicto mientras dan paso al campamento de espera que se menciona en los tribunales de Tokio.